第 64 回 世界遺産検定 マイスター試験
講評 および 学習方法

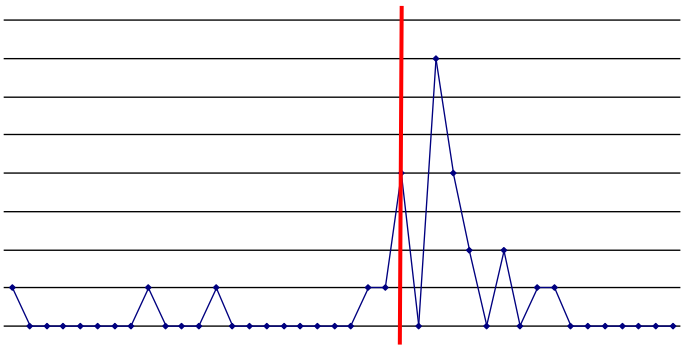
1. 実施概要　2. 認定点と分布　3. 問題　4. 総評　5. 各問の短評と学習法

1. 実施概要

検 定 日：2026 年 7 月 12 日（日）
検定会場：東京・名古屋・大阪
検定時間：120 分
解答形式：論述形式（記述）
申込人数：30 名
受検人数：27 名
認定者数：18 名（認定率 66.7%）

2. 認定点

認定点：12 点（20 点満点）
最高点：16.5 点
最低点：0.5 点



3. 問　題

1 次の語句を簡潔に説明しなさい。
1. プレリミナリー・アセスメント
2. 世界遺産基金
3. 登録基準（iii）

2 世界遺産条約について、次の語句をすべて使って、400 字以内で説明しなさい。なお、解答中の次の語句の使用箇所には下線を引きなさい。

義務と責任　　教育事業計画
危機遺産リスト　　1975 年

3 「飛鳥・藤原の宮都」に登録勧告が出され、第 48 回世界遺産委員会で登録される見込みである。不動産を登録する世界遺産活動の中で、飛鳥宮跡や藤原宮跡のように一見しただけでは価値が伝わりにくい遺産の価値を、どのように伝えると持続可能な保護活動につなげることが可能か、他の遺産の例を挙げながら、1,200 字以内で論じなさい。

4. 総　評

今回は全体の受検者数が多くなかったこともあるが、全体的にレベルの高い解答が多かった。1 と 2 はよく対策されており、ここではあまり差がつかなかった。3 については解答の自由度が高く、さまざまな解答が予想されたが、現実的な解決としては難しい点もあり、結果的に似たような解答が多くなった。その中でも、観光や教育と結びつけた視点で論じたものや、多くの解答で見られた AR や VR の活用に加えて、その課題などを指摘した解答もあり、そうした他とは異なる独自の視点を入れた解答は得点が高くなった。マイスター試験ではここのところ、解答の自由度が高い問題が多く出題されており、情報の正確さや比較する遺産の適切さだけでなく、どれだけオリジナルの視点を通して論理的に論じることができるかが、高得点の鍵となる。

ⓒ World Heritage Academy All rights reserved.

5. 各問の短評と学習法

1

短　評：それぞれの語句を約 50 文字以内で説明する問題。「世界遺産基金」では、UNESCO の信託基金である点や、世界遺産委員会が決定する目的にのみ使用することができる点など、短い中で 2 つ程度のポイントが含まれていることが求められる。各語句の説明の中でどこが重要なのか、準備の段階で優先順位つけることも必要である。

学習法：このように少ない文字数で要約する場合、ポイントとなる語句をはずさないようにする。間違ってはいないが本質ではない点をいくら並べても説明としては不十分なので、学習の際には、**それぞれの語句の最重要ポイントがどこであるかを考えながら、キーワードを正しくつかむ**ことが重要である。

2

短　評：指定語句を用いて重要なキーワードを説明する問題。この問題は毎年基本的に同じ世界遺産条約について説明するものであるが、指定語句によって書き分ける必要がある。今回は、「1975 年」という世界遺産条約が発効した年が含まれており、そこで「1975 年に発効した」というだけでは不十分で、なぜ発効が 1975 年になったのかということを短いながらも説明できていると得点が高くなった。

学習法：書く前に必ず**全体のプロットを作る**必要がある。「世界遺産条約」を説明するのに必要なキーワードを書き出し、それを組み替えながら全体のプロットを考える。問題中の**使用指定語句は、どのような解答が求められているかのヒント**であるといえる。学習の段階では、重要語句のキーワードやポイントを抜き出しておくとよい。また「世界遺産条約」の意義や目的、採択の背景なども理解し、それを限られた文字数と指定語句の中に加えられるよう、自分なりのまとめなおしが必要である。そのためには、**文章ではなく語句で覚え**ておき、問題に合わせて語句を組み合わせるようにするのが重要である。また、指定文字数の 8 割を書かないと減点の対象となる。

3

短　評：今回の問題は、一見しただけでは価値が伝わりにくい遺産に対して、①どのように価値を伝えるとよいのか、②それをどのように持続可能な遺産の保護につなげていくのか、という 2 つの点を含んでいる必要があった。①の点については、AR や VR を用いるという解答が多く見られたが、AR や VR だけでは遺産の価値の一側面や、遺産そのものの断面しか伝えることができないため、そこに観光や学習の要素を組み合わせることが重要で、その点にまで論考を広げられているかどうかで差がついた。また②の、正しく価値を伝えることが遺産の保護につながるという点でも、AR や VR による地下遺構などの可視化だけでなく、そこに映画化やゲーム化などを組み合わせて収益化を図り保全に活用するなど、独自の論考をしている解答もあり、高得点となった。やはり、独自の視点をどこまで論理的に述べられるのかがここでは重要になってくる。

学習法：1,200 字というかなり長い論述問題の場合は、書き始める前に必ず**全体のプロットを作る**必要がある。その時に、**序論・本論・結論のスタイル**にするのか、まず**結論を書いてから後で説明するスタイル**にするのか決め、全体を見ながら、それに沿うようにキーワードなどの箇条書きでプロットを作る。それに肉付けする形で、書き上げてゆく。世界遺産条約から大きく外れた出題はないので、ある程度共通して使える要素も準備しておくとよい。論述問題では**「正解」というものはない**。いかに自分の意見を論理的に述べられるかが高得点の鍵となる。当然、**自分の考えを述べる時には、思い込みではない正確な情報で根拠を示す**必要がある。文字数指定があるので、最低でもその 8 割は必ず書くようにする。

ⓒ World Heritage Academy All rights reserved.